
白皇学院生徒会副会長霞愛歌

dandy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白皇学院生徒会副会長霞愛歌

【Nコード】

N2222I

【作者名】

dandy

【あらすじ】

「ハヤテのごとく！」凛として、可憐な霞愛歌さんの短編小説です。

10月9日の朝。

「……っ。……は。よく寝た……」

愛歌はいつもどおり、7時に起床。そしていつもと変わらず制服に着替え、パパッと朝食を済ませた。

「……じゃ、行つてきます」

「行つてらっしゃいませ、愛歌お嬢様」

お手伝いの女性に見送られ、愛歌は白皇学院へ。いつもと同じように歩いて白皇へ向かう。すっかり秋の陽気で乾いた風が愛歌の体に冷たく当たる。体が強いとは言えない愛歌はすでに学校指定の茶色のコートを着ての登校。しかしまっすぐ白皇へは向かわない。なぜなら待ち合わせをしているからだ。いつも一緒に登校している友人と。

「千桜さん、おはよう」

「あ、愛歌さん。おはようございます。…あれ？もうコート着てるんですか？」

「ええ。ちよつと寒くて…」

待ち合わせ場所の橋の上にいたのは同じクラスで同じ生徒会の春風千桜。

「じゃ、行きましょう」

「ええ」

二人は合流するなりすぐ白皇を目指す。愛歌のペースに合わせて歩くため、歩調はそんなに速くはない。

「でも…今日は朝の生徒会の会合ありませんし、ゆっくり行きましょう、千桜さん」

「いいですよ」

何事もなく、二人は教室に到着。すでに他の生徒も殆んど教室に付いていた。

「おはよう、愛歌さん、ハル子」

「おはよう、ヒナ」

教室に入るとすぐに生徒会長の桂ヒナギクがやって来た。

「そうだ！二人とも、今日は生徒会の仕事は休んでいいわよ」

「え？会長、たしか今日までの書類が…」

「大丈夫よ。一人でなんとか終わるから」

「ヒナ、無理しないでね」

「ありがとう、愛歌さん」

そんなわけでいつも行くはずの生徒会の仕事はこの日は休みに。授業もいつもと変わらずトントントン拍子で進んだため、すぐに放課後に。

「じゃ、今日はこれで終わりよ。みんな、気をつけて帰りなさい」

担任の桂雪路の号令でこの日の学校は終わりに。すると…。

「愛歌さん」

「はい？」

千桜に後ろから声をかけられた愛歌が振り返ると…。

パパーン！

無数のクラッカーが音を鳴らす。

『誕生日、おめでとうございます…!!』

「み、みんな…」

千桜を始め、生徒会メンバーに誕生日を祝福される愛歌。
10月9日は愛歌の誕生日なのだ。

「おめでとっ、あーちゃん」

「日頃の感謝を込めて…」

「我々三人からのケーキです！」

生徒会三人娘からは手作りケーキがプレゼントされた。真ん中には「18」の文字が。

「あら…私、今年で17なんだけど…」

あからさまに凍る空気。三人娘は目を合わせる。

「い、いっ！？うそお！？」

「い、泉！…お前確か18だって…」

「ちゃ、ちゃんと調べたよ！理沙ちゃんだって18で合ってるって…」

「…す、すみません！愛歌さん！…」

必死に謝る三人。しかし愛歌は怒るところか笑いながら言う。

「ウソ」

「……シャレになりませんよ!!」「」

「ごめんね。……ありがとう。早速食べてもいいかしら?」

「う、うん。けど……あんまり自信ないよ……」

愛歌はスプーンで一口食べる。

「……あなたが作ったにしては上出来ね」

「……誉めてるんですか? 愛歌さん」

「ふふ。とってもおいしいわよ。あなたたちも食べてみたら?」

三人娘も早速食べる。

「お、おいしい!」

「私たちが作ったにしては上出来だな」

「この濃厚な白いクリームが結構うまいぞ」

「はいはい そのクリームは私が作ったやつだよ」

もう愛歌はほったらかしで自分たちが作ったケーキを食べる三人。
お次は……。

「愛歌さん、誕生日、おめでとうございます」

「あら…綾崎君までプレゼントをくれるの？」

「まあ…僕からというよりかはお嬢様からです」

三千院ナギお嬢様は相変わらずこの日も学校を休んだので代わりに執事の綾崎ハヤテがプレゼントを届けたわけだ。

「で…これがそのプレゼントです」

「あら、ありがとう」

愛歌はハヤテから細長い箱を受けとる。ちょっと重たい。

「何ですか？これは？」

「僕もよくわからないんですよ。でも…お嬢様、とってもよく出来たって言うてましたから、ご自分で作ったものかと…」

「へえ…。じゃ、後で見てみるわね。ナギちゃんによろしくね」

「はい」

ハヤテから謎のプレゼントを受け取った愛歌。最後は…。

「愛歌さん。おめでとうございます」

「千桜さん、ありがとう」

千桜が愛歌に渡したプレゼント。それは…。

「あら。これって…万年筆？」

「はい。これで愛歌さん、ずっと書き続けられますよ」

「書き続けられるって…一体何を？」

「え？あ…それは…」

（じゃ、弱点帳…）

「もしかして弱点帳？」

「うっ！」

（こ、心を読まれた！？）

千桜の顔が青ざめる。

「へー…。千桜さんはそんなに私に弱点を書いてもらいたいんですか」

「い、いや！そういうわけでは…！…！」

「くすつ。冗談よ」

「…本当ですか？」

馴染みの面々から誕生日プレゼントをもらった愛歌が次に向かったのは生徒会室。

「ヒナには仕事はしなくていいと言われたけど…そのヒナに用事が…」

数日前。生徒会室にてヒナギクと愛歌は二人きりで仕事をしていた。

「愛歌さん、ちょっといいかしら？」

「ん…？何？」

「えっと…9日なんだけど、夜、家に来ない？」

「9日…？いいけど、一体どうして？」

「いや…その…9日は…愛歌さんの誕生日ですよね」

「もしかして、祝ってくれたり？」

「は、はい。もしよかったら…」

「ありがとう。じゃあ…ぜひともお邪魔させてもらっわね」

というわけでヒナギクの家に行くためにまずは生徒会室にいるヒナギクの元へ。

「あら、愛歌さん。どうかされましたか？」

ヒナギクは生徒会室に来た愛歌に気付いた。

「約束どおり、今日はヒナの家でごちそうになるわね」
「はい。じゃあ…ちょっと待っていてください。あと少しで終わりますから」

生徒会の仕事を終えたヒナギクは愛歌と共に桂家へ。

「…そういえばヒナの家に行くなんて初めてね」

「そういえばそうですね。…知り合ってからもう1年以上経つのに

…。意外ですね」

「そうね。…でも、ヒナもだんだん生徒会長が板についてきたわね」

「そうですか？…でも、愛歌さんに出会わなかったら私、生徒会に入ってなかったのかな…なんて」

話は去年の春までさかのぼる。愛歌は出席日数が足りず、1年留年することになり、校舎から少し離れたベンチに座っていた。

（…まあ仕方ないわね。体が弱いのは元々だし。それにしても…学校に来るの、本当に久しぶりね）

すでに放課後。当時から生徒会に入っていた愛歌は久しぶりに生徒会室に行こうとした。すると前からキョロキョロと回りをみながら歩いている少女が。愛歌は早速声をかける。

「あの…どうかしました？」

「あ…その、け、剣道部ってどこにあるかわかりますか？」

彼女こそ後の生徒会長ヒナギク。二人の初めての出会いだった。

「ええ。…あなたもしかして新入生？」

「はい…。剣道場の場所がわからなくなって…」

「剣道部に？…一応言っておくけどうちの剣道部、あまり人気ないわよ」

「構いませんよ」

「かわいいのにもつたいないわね…」

「そ、そんなことはありません！」

早速二人は剣道場へ…。がしかし。

「…今日は休みみたいね」

「そうですか…。ならまた明日来てみます」

ヒナギクはすぐその場を立ち去ろうとした。

「あ、ちょっとあなた」

「はい？」

愛歌はヒナギクを引き留めた。

「あなた…生徒会に興味ない？」

「生徒会ですか？」

「ええ。…実は私も生徒会に入ってるんだけど、良かったらどうかしら？」

「でも…何で急に？」

ヒナギクはなぜ急に生徒会に誘われたかピンとこなかった。

「なんか感じたのよ。あなたは人の上に立つ器のような気がするの」
「…ただの勘ですか？」

（でも…やって損はないかな）

「わかりました。…でも、いいんですか？一年生の私になっても」
「大丈夫よ。生徒会なんてやりたい人がやるのが普通だから。それに私も一年生よ」

「え！？…そうなんですか！？」

「1年留年したのよ…」

「……あ。ご、ごめんなさい！私、そんなこと知らなくて…」

「いいのよ。じゃあ…ちょっと生徒会室に来てくれる？他のメンバーにもあなたを紹介したいから」

「はい。わかりました。…そういえば…お名前は？」

「私？私は霞愛歌」

「私は桂ヒナギクです。よろしくお願いします。霞さん」

そして向かったのはもちろん時計塔最上階。

「見て、桂さん。この景色。これも生徒会の者だけが見れるのよ」

「……はふぁ」

「……大丈夫？」

「じえんじえん大丈夫……です。というか生徒会室つてまさか……」

「時計塔最上階よ」

「ふぁ……」

ヒナギクはクラクラしてその場に座り込む。

「……桂さん？」

（……まさか高所恐怖症？だったら尚更生徒会に入れてあげたいわね）

愛歌の内なるS気が顔を覗かせた。その後いろいろあり、ヒナギクは1年で生徒会長に任命されることに。

「あ、ここです」

回想シーンの間に二人は桂家に到着。

「今日はお義父さんもお義母さんも仕事でいないの。お姉ちゃんは…相変わらず…」
「へっ…」

二人は早速ヒナギクの部屋に。

「ここが私の部屋。あ、ちょっと待ってて。飲み物持ってきますから」

「うん。ありがとう」

ヒナギクは一度部屋から出て、一階へ。

「……………」

（にしても…。やっぱりきれいな部屋ね。整理も行き届いてるし…）

「おまたせ。はい、愛歌さん」

ヒナギクは紅茶を持ってやって来た。

「あら、ありがとう」

「いえ。…あの、愛歌さん」

「…なに？」

紅茶を一杯口にした愛歌はヒナギクを見る。

「夕飯を作る前に…そ、相談があるんですが…」
「相談？いいわよ」

ヒナギクは正座をして話を始める。

「あ、愛歌さんには…確か許嫁がいますよね？」
「ええ。一応ね」
「…好きですか？」
「まあ…体の弱い私のことを気にしてくれてるからいい人には違いないわ」
「す、好きな人とうまくいくには…ど、どうしたらいいんですか？」

愛歌は恥ずかしながら聞くヒナギクを見て思った。

（…恋の悩みか…。まあ想像はつくわね。彼とあんなことがあったなら尚更…）

「そうね…。まずは態度で示したら？」

「態度…？」

「なんというか…さりげなく手を繋ぐとか、一緒に行動したりとか、いつも近くにいることが…」

「それがダメなんです…。彼、今は私なんかより学校生活や仕事が大事で…」

「仕事…？社会人に恋をしてるの？あ、でも学校って…？」

（ふふ…。これなら嫌でも名前を言わざるを得ないわね…）

予想を確信に変えるため、ヒナギクの口から名前を言わせようとする愛歌。

「えっと…」

（い、いかん！相談したはいいけど愛歌さんに私がハヤテ君が好きだと知れたらなんかまずいわ。なんか）

「と、とにかくどうしたらいいですか！？」

勢いで話を進めるヒナギク。それに対し、愛歌は…。

「そうね…。なら、やっぱり最後は…」

「最後は！？」

「肉体的刺激かしら」

にっこり笑う愛歌とは対照的にヒナギクの顔は真っ赤に。

「ちょっと愛歌さん!!何を言い出すんですか!!」

「…何を勘違いしてるのよ。なら、キスとかしてみたら?」

「そんなこと…できません。第一…向こうが私のこと好きかもわからないのにキスだなんて…。関係が悪化したら…嫌だし…」

(それに…大事な人ならなおさら…)

「そっか…。力になれなくてごめんね」

「い、いえ!じゃ、じゃあ私、夕飯作りますからもうしばらく待っていてくださいね!」

ボタン!

逃げるようにしてヒナギクは部屋を出た。

(さて…1人になっちゃったわね…)

愛歌は1人になったためヒナギクの部屋の中を見渡してみた。すると机の前には一枚の写真が。

「…あら？これって…綾崎君？」

そこにはヒナギクとハヤテが写った写真が。

「…なんだかヒナつたらすごい幸せそうな顔ね…。綾崎君はそうでもないけど」

机の中や私物を物色したらもつと面白そうなものが出てきそうだと思っただが愛歌はそれ以上、見るのをやめた。そして愛歌もヒナギクのいる一階へ。

「あれ？愛歌さんは上にいてもいいのに…」

「なんだかあの部屋にいたらじつとしてられなくて…。ここで待つてもいいかしら？」

リビングの椅子に愛歌は腰掛け、ヒナギクに話しかける。

「ヒナもいつかは私じゃなくて彼にごはんを作るようになるのね」
「！ーちよつと愛歌さん！？」

ヒナギクは動揺して調理を中断。

「…彼だなんて。確かに…できるなら毎日でも作ってあげたいですよ。はあ…」

（ハヤテ君…全然こっちを見てもくれないし…）

再び調理を再開。

「そうなんだ…。ヒナをそこまで悩ませる男の子がこの世にいるなんてね…」

「悩んでないです！！ただ、悔しいと言うか…」

「悔しい？何が？」

「私、こんなに女の子らしいところがあるのに、彼は私のこと、全然女の子として見てくれないし…」

「その彼は理想が高いのよ」

（贅沢ね、綾崎君…）

「まあ焦らなくてもいいんじゃないかしら？ヒナならいつか、きっと彼に気付いてもらえるわよ。…というより告白しちゃったら？」

「告白は…ちよつと…」

「…あ、そう…」

（ふう…。こりゃ先は長いわね…）

ヒナギクも調理が終わり、後は煮詰めるだけだ。

「今夜はカレーですから。…誕生日なのにカレーを振る舞うのもどうかなって思ってたんですけど…。私なんかが作るより愛歌さんならいつも家でもっとすごい料理を食べてるかなって…」

「そんなことないわよ。…いい香りね」

そんな時、愛歌はふとあることを思い出した。

「そう言えば…」

一度ヒナギクの部屋に戻り、カバンからあるものを持ってきた。

「愛歌さん？何ですか？その箱は？」

「実はナギちゃんからも誕生日プレゼントをいただいたのよ」

そして中から出てきたのは…。

「…何かしら？このピンは？」

薄い黄土色の液体が入ったピンが一本。と一枚のメモ書きが添えられていた。

『副会長 誕生日おめでとうなのだ！紅茶が好きだと聞いたのでお祝品として私、三千院ナギのスペシャルミックスグレートリアルブレンドティーをプレゼントするのだ！』

「こ、紅茶…？ヒナ、とりあえずカップを…」

「あ、うん…」

早速ナギの作った紅茶（？）を注ぎ、一口飲む。

「……………」
「苦い」

ようやくカレーも出来上がり、二人だけの誕生日会が始まった。ちなみにこの時愛歌が食べたカレーは生涯最高のお口直しになったとかならなかったとか…。

その頃三千院家では…。

「そう言えばお嬢様？愛歌さんに一体何をプレゼントしたんですか

「？」

「おお。それか。私が直々に紅茶を作ってプレゼントしたのだ！さぞかし喜んでるだろうな」

「……ですね」

（僕も明日、愛歌さんにプレゼントしよう。……胃薬を）

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2222i/>

白皇学院生徒会副会長霞愛歌

2010年10月21日22時34分発行